

藪についての考察

片野修

かつて「遺伝」という雑誌に「小川と藪に囲まれて」というエッセイを書いたことがある(片野 1999)。藪とは、植物が生い茂っており、その奥が見通せないところをさす。小学生の頃に富山県の田舎町に住むことになったのだが、そのあたりには小川や藪が多く、そこで魚を釣ったり虫を捕ったりしたことを書いたものである。その一部を以下に再録する。

一つは、広々とした水田地帯のなかにあった。曲がりくねった幅 2m ほどの農業水路が大きな木にぶつかり、その木の根本がえぐれて深くなっていた所である。木の根が川のなかで複雑にからみあい、魚の隠れ場所をつくり出していた。そのあたりでは、川幅も広まり、水路いっぱいには繁茂していた水草も切れて、少しだけ水面が開いていた。私が安い竹をつないだ釣り竿でその木の根本へ浮きを飛ばすと、体長が 10cm ほどの小ブナが必ず何尾か釣れた。・・・曲がり角の木の樹肌にはいくつもの傷跡があった。樹液を出させて、昆虫を採ろうとする子どもたちの仕業だった。実際、そこにはよくカブトムシやクワガタなどの甲虫が集まっていた。ぼんやりとしていると何もない水田地帯の真ん中に、子どもたちにとってかけがえのない場所があった。

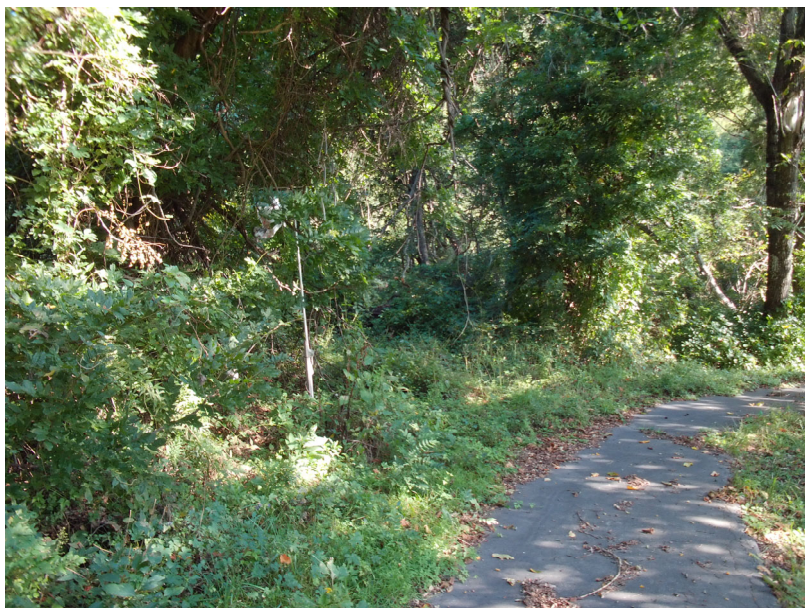
私の家の裏手には、少し大きな川の土手沿いに藪が続いていた。子どもらが立ち入ることができないほど、その藪は低木や雑草、蔓草などに覆われていた。私の家は扇状地の末端にあったので、当時は至るところで湧水が湧き出しており、その湧水が小川となって流れ出していた。私の家の近くの藪のなかでも水が湧いていたが、その水底を見ることはできなかった。周囲がうっそうとしていて暗いうえに、水草や落葉におおわれていたからだ。ただし、そこで一か所だけ妙に明るく開けた場所があった。畳一畳ほどの水面がなぜかそこだけ開いていた。私はよく友だちとそこへ行って、藪の奥を眺めたり釣りをしたりした。そのあたりでは、木の枝から大きなへびがぶら下がっていたことがあり、ふいにイタチやウサギや野犬があらわれることもあった。だから私はそこへ行くと妙に緊張した気分になり、何かを期待しながらも何かにおののくような不思議な感覚を覚えた。

このエッセイの後半は、子供の頃に豊富に見られた小川や藪が開発されて消えていったことを述べているのだが、この頃、その風向きが変わっているような気がしている。そこで、日本における森林や藪の変遷について概観してみたい。

人口が少ない時代には、森林も藪も豊富にあった。縄文時代の日本の人口はおよそ 10 万人、平安時代で 650 万人だった。源氏物語の中には、落ちぶれた姫がひっそり暮らしている屋敷は雑草と藪に囲まれており、キツネがあらわれることがあると書かれている。それが江戸時代になると人口は急速に増えて、明治・大正時代には 5000 万人を超えた。江戸時代には、石油や石炭はまだ十分に利用できなかったため、人々は森林や藪を切りはらって燃料

とした。残った灰は人糞とともに、田畑の肥料として利用した。その結果、明治にかけて日本の森はどこもはげ山になり、山地は崩壊し、土砂崩れが頻発するようになった（太田 2012）。

あまりの惨状に明治政府は明治 30 年に森林法を整備し、森林の伐採を規制するとともに、成長の早い杉などの樹木を広範囲に植林した。石油や石炭も利用しやすくなり、肥料も普及するようになったので、里山の藪は増えていった想像される。



川沿いの藪

大正 13 年（1924 年）頃に宮沢賢治に執筆された「虔十公園林」という作品は、子供らにも馬鹿にされていた虔十という男が杉の苗を植え、その苗が虔十の死後も育って人々の潤いになるという話である。その冒頭に次の記述がある。

虔十はいつも縄の帯をしめてわらって杜の中や畑の間をゆっくりあるいているのです。雨の中の青い藪を見てはよろこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹を見付けてははねあがって手をたたいてみんなに知らせました。

藪があることによって動物には隠れ家となり、豊かな自然が保たれることが簡潔に表現されている。また藪があることによるこぼという心情は、はげ山だらけだった時代があったからこそ理解されるかもしれない。この作品は生前未発表であったが、1924 年（大正 13 年）ごろ、賢治が 28 歳のときに執筆されたと言われている。

戦後になると、人口がさらに増えて、平地はほとんど開発されて、宅地や農地が変わって

いった。高度成長時代になっても山林は放置されたが、平地の藪は減っていったと考えられる。

ところが最近、日本は人口減少時代に突入した。人口が増えているのは首都圏くらいで、地方では人口減少がいちじるしい。政府は地方を活性化しようとしているが、うまくいっていない。高齢者ばかりの地方の集落では草を刈る者もいなくなり、藪は増え続け、動物の隠れ家になっている。一方で、都市部には人口が集中し、藪どころか空地もなくなっている。

しかし、人口減少にはよい側面もある。地球全体で見れば、人口は増え続けているので、日本で人口が減れば、それだけ二酸化炭素の放出を防ぐことができる。日本各地で失われた自然を回復させる契機にもなるだろう。藪が増えれば、そこに棲みつく動物は増え、度十が感じたように、自然の豊かさが人々に幸せをもたらすにちがいない。植物によって吸収される二酸化炭素は増加して、カーボン・ニュートラルに近づくことができる。



藪から出てきたコマドリ（舢倉島）

ちなみに、私はバードウォッチングを趣味とするのだが、どちらかと言うと、高木の樹冠にいる鳥より、低木や藪に棲む鳥の方が見つけやすく好きである。具体的には、ヤブサメ、コマドリ、ミソサザイ、ジョウビタキが挙げられる。昔、山形県庄内の赤川にサクラマスを釣りに通っていたときに、釣りに（釣れなくて）飽きると、海沿いの防風林の中で、ミソサザイの鳴き声を聴いて癒された覚えがある。

人口減少にともなって人手不足になることが懸念されている。しかし、AI の活用によって仕事は減ると予想され、それでも必要な人材については外国に求める方法もある。利用されなくなった土地は、太陽光発電や風力発電あるいは大規模農業に転用されたらよい。人口が減ることによって、食料自給率を高めることもできるかもしれない。現在の日本では、平野部は開発しつくされ、いたるところに人々が住んでいる。将来的には地球温暖化が進むことによって、住むのに適さない地域も増えるはずである。危険な地域からの住み替えも促進

されるだろう。

都会では公園の樹木が切り倒されることが話題になっている。藪のようなものはなくなり、小綺麗に整備された花壇のようなものばかりが目につく。そんなところを歩いてみても、驚くようなことは起こらず、退屈なだけである。オーストラリアでは、藪の中を突っ走るブッシュ・ウォーキングが人気だが、これはただグラウンドを走るのではおもしろくないからだろう。

都会では、一見、汚らしい商店街や飲み屋街、屋台村も消えつつあり、きれいな商業ビルに変わっていく。ここには藪を切り払うのと同じような、町や自然の「整列化」とでもいうような現象が起きている。それではつまらないと思う。きれいなだけの町や自然なら、インターネットやテレビで見ればよい。その場所を歩くことによって、思わぬ鳥があらわれたり、見知らぬ野草やキノコが生えていたり、甲虫や蝶が飛んできたりする自然が貴重だと考えたい。クマは困るが、タヌキやキツネやキジを見ることができれば嬉しいものだ。商店街や飲み屋街では、思わぬ人と出会い、買う予定のなかったものを買ったり食べたりするかもしれない。そういう経験ができる場所、藪にかぎらず、藪のような場所を増やすことが未来に向けて必要だと思う。

追記

最近、クマが人家に近いところに出没することが多く、その対策として藪を切り払うことが推奨されている。しかし、クマが里にあらわれるのは、藪があるからではなく、山の食物が不足し、里に木の実や農作物が豊富にあるからである。この頃のクマは一日に何キロも移動し、藪のない町中や人家の中にも入ってくる。人を食べ物として狙うクマも増えている。このような状況では、現在行われているように、柿やクルミの木の伐採、生ゴミの管理、戸締りの徹底などの対策は必要である。クマ多発地帯では、人家の近くにある藪は切り払った方が安全だろう。クマが嫌う電気柵や高音を発する「忌避音響装置」も設置されつつある。それでも人里に近づき、人を襲う危険のあるクマは駆除されるべきである。重要なことは、クマの個体数を低いレベルに管理することであり、すべての藪をなくすために多大の労力を費やすくらいなら、クマの個体数を減らすことに注力するべきである。

引用文献

片野修（1999）小川と藪に囲まれて。遺伝 53(12): 4-5

大田猛彦（2012）森林飽和—国土の変貌を考える。NHK ブックス 1193

宮沢賢治（1961）虔十公園林。銀河鉄道の夜, 7-17。新潮文庫